

小學脩身課書

南摩綱紀編

三

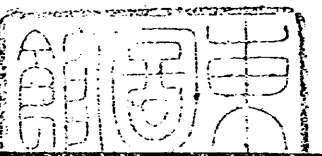
K 110.1
112
3

南摩綱紀編

小學脩身課書

明治十五年四月
廿五日版權免許

中外堂藏版



小學修身課書卷三

初等二年後期

南摩綱紀編

○日用の間、纖毫の事と雖も、皆當

に謹慎よまべし。薛文清公

○一言の過ちも、莫大の禍となり。

一事の失も、終身の憂とある。慎む

べし。大和俗訓

小學修身課書

中外堂藏版

○子弟たる者ハ。居處を灑掃。凡案を拂拭。書籍筆硯。凡百器用。皆整齊よまべし。童蒙須知

○几案ハ必ま整齊よし。簡帙ハ亂まべからざ。書篋衣笥ハ必ま扇鑰を慎み。堂室ハ必ま潔淨よまべし。

程董學則

○黎明即ち起き。庭除を灑掃。内外を整潔よまざるを要ま。治家格言

○人の書籍を借らば。帳簿よ記るし。時よ及びて還まべし。童蒙須知

○書を讀む時ハ。几案を端正よし。書籍を整齊よし。身體を正くし。詳緩よ字を看て。子細分明よまべし。

同

○書を讀むよ。心を專よして字を看。句を斷ち。慢く讀之。字字分明あるを要む。目東西を視。手他物を弄ふ勿れ。教子齋規

○書を讀むよ。字字響亮なるべし。一字を誤るべからむ。一字を少く

まべからむ。一字を多くまべからむ。一字を倒よまべからむ。童蒙須知

○書を讀むよ。強て暗記まべからむ。只た數遍誦讀まべし。自然よ口に上り。久遠忘れむ。同

○書を讀むよ。三到あり。心到り。眼到り。口到るをいふ。三到の中心到

最も急なり。心既よ到れば。眼口も亦到る。同

○書を觀る一卷なれば。一卷の益あり。一日なれば。一日の益あり。倪文節

○書を讀むに必ず專一よし。字を寫すは必ず敬むべし。程董學則

○程明道曰く。吾れ字を寫す時甚

だ敬む。字の好からんことを欲せり。あらば。便ちこれ學なり。

○字を寫すよば。未だ工拙を問はむ。且つ一筆一畫。嚴正分明なるを要す。童蒙須知

○書を學ぶよば。志を聚めて筆を把り。字ハ齊整圓淨なるを要す。輕

易糊塗なる勿れ。教子齋規

○父命トて呼ぶば。唯一て諾せず。
手よ業を執れば。これを投げ。食口
よあれば。これを吐き。走りて趨ら
ず。禮記

○親老れば。出づるよ方を易へず。
復るよ時を過ごさず。親瘠めば。色

容盛ならむ。同

○孝子の老を養ふは。其心を樂ま
しめ。其志よ違はむ。其耳目を樂ま
しめ。其寢處を安んト。其飲食を以
て。これを忠養む。曾子

○父母の愛する所は亦これを愛
し。父母の敬する所は亦これを敬

を。犬馬も至るまで盡く然り。況んや人も於てを也。同

○病みて牀に卧せぬれを庸醫も委ぬるべし。不慈不孝も比を親も事ふるもの。亦醫を知らざるべからむ。近思錄

○孝行の條目は數多あれども二

條に約まれり。第一は父母の心を安穩にせむるなり。第二は父母の身を敬ひ養ふなり。翁問答

○弟子入れば則ち孝。出づれば則ち弟。謹みて信。汎く衆を愛して。仁を親しむ。行ふて餘力あれば。以て文を學ぶ。論語

詩經
○凡そ今の人。兄弟よ如くいなし。

○豈よ他人をうらんや。我が同父
よ如くむ。同

○兄弟墻よ鬩めげども。外その侮
を禦ぐ。同

○兄よ宜しく。弟よ宜まひ。令徳壽

豈なり。同

○死喪の威れ。兄弟孔だ懐ふ。原隰
よ哀まる。兄弟を求む。同

○兄弟の小念ありと雖も。懿親を
廢てむ。左傳

○朋友よ一切切悃悃。兄弟よ怡
怡たり。論語

○仁人の弟よ於る也。怒を藏さず。怨を宿めず。これを親愛するのこ。これを親しめば。その貴からんとを欲し。これを愛まれば。その富まんことを欲す。孟子

○人の兄としてい。慈愛ふして友を見る。人の弟としてい。敬誦より

て悼らむ。荀子

○朋友講習む。易經

○二人心を同くせれば。その利金を斷つ。同心の言。その臭蘭の如し。同

○君子い上よ交りて諂ひむ。下よ交りて瀆らむ。同

○晏平仲善與人と交る。久くしてこれを敬む。論語

○子貢友を問ふ。孔子曰く。忠よ告げて。善くこれを道びく。不可あれば則ち止む。自ら辱めらるることなり。同

○益者三友。損者三友あり。直を友

とす。諒を友とす。多聞を友とす。益なり。便辟を友とす。善柔を友とす。便佞を友とす。損なり。同
○長を挾まむ。貴を挾まむ。兄弟を挾まむ。して友たり。友いその徳を友とす。るなり。以て挾むことあるべからむ。孟子

○勢を以て交る者い。勢傾けば則ち絶つ。利を以て交る者い。利窮まれば則ち散む。故に君子い與とせむ。王通

○君子い先は擇びて。後と交はる。小人い先は交りて。後を擇ぶ。故に君子い尤め寡し。同

○善人は不善人の師ふして。不善人は善人の資なり。老子

○賢を見てい。齊しからんことを思ひ。不賢を見てい。内は自ら省りこる。論語

○衆これを惡むも必む察し。衆これを好みまざるも必む察む。同

○善人と同トく處れ。日よ善訓を聞き。惡人小從ひ遊べ。日小邪情を生む。蓬麻中オ生むれ。扶けむ。白沙オ縹中オ入れ。染めむ。自ら黒し。論衡

○人を待つは豊なるを要す。自ら奉むるは約なるを要す。續小兒語

○己れを責むるは厚きを要し。人を責むるは薄きを要す。同

○人を虧くはこれ禍。己れを虧くはこれ福。人を怪むは深くまるとさうれ。人小望むは過ぐるることさうれ。同

○人譽れは我れ謙む。又一の美を

増となり自ら誇れば自ら敗る。又
一の毀を増きたり。同

○家の主たるものい。身を修め。家
を興を以て志とし。父祖の遺財
を失いざるを以て孝とをべし。天
災より。財産を失ふも。人力の及
ぶ所又あらば。己れ不徳よりて。と

れを減耗するい。大なる不孝と謂
ふべし。家道訓

○子路人これよ告るふ過ちある
を以てをれば則ち喜ぶ。孟子

○子路過ちあり。七日食をむ。孔子
これを聞て曰く。由や過ちを改む
ることを知る。劉氏人譜

○過ちを知るは難きふあらむ。過ちを改むるを難くと云。同

○幼ふして敢て長し事へむ。賤ふして敢て貴し事へむ。不肖ふして敢て賢し事へざるはこれ人の三不祥なり。荀子

○我れ人小勝るを誇るなれ。我

れよ勝れる者還た多し。紳瑜

○奢る者の富みても足らば。儉する者の貧しくしても餘りあり。奢る者の心常よ貧しく。儉する者の心常に富む。譚子

○勢力を恃みて。孤寡を陵ぐこと勿れ。治家格言

○事は因りて相争ふ。安んぞ我の
不是を知らざるを知らん。心を平し
して。再び思ふべし。同

○人の嘉慶あるを見て。妬忌の心
を生むべからむ。人の禍患あるを
見て。喜幸の心を生むべからむ。同
○人の微賤あるも。皆當よ誠敬を

以てこれを待つべし。忽慢よまをべ
からば。薛文清公

○人の過ちを見てい。必む我が身
を省るべし。程漢舒

○人の不善を見れば。惡むことを
知らざるいなし。己れの不善あれ
ば。これよ安んじて顧むべし。幼儀雜箴

○人の不善を聞かば。婢僕の過ちと雖も。包藏して聲言さべからず。告語して改めしむべし。童蒙須知

○天下何事か。怒よ因りて錯らざらん。怒る時は忙し。忙しければ錯る。陸稼亭

○怒れば横語多く。喜べば狂言多

し。一時褊急をれば。過ぐる後よ羞慚あり。續小兒語

○言口よ發まれば。臧となり。否とある。人ふ加はれば。喜となり。嗔とある。幼儀雜箴

○世ふ處るい多言を戒む。言多ければ必ぶ失あり。治家格言

○愛敬ハ人道の本なり。親ヨ用ふ
 れば孝と曰ひ。君ヨ用ふれば忠と
 曰ひ。子ヨ用ふれむ慈と曰ひ。衆ヨ
 用ふれば仁と曰ふ。順悌惠信皆愛
 敬ヨ非むと謂ふことなり。翁問答

○軽く人の言を信むる時ハ安ん
 ぞ其譖訴ヨあらざるを知らん。當

ヨ忍耐三思をべし。朱熹

○常ヨ虚誕を説く者ハ時ありて
 信誠のことを言ふと雖も人これ
 を信せむ。紳瑜

○敬を以て徳を畜ひ。静を以て志
 を養ふ。幼儀雜箴

○好話を説き。好心を存し。好事を

行ひ。好人小近づく。續小兒語

○暗室小人なると雖も。自身怎ち

自身を見る。同

○敬怠は勝つ者い吉。怠敬は勝つ

者い滅ぶ。大戴禮

○義欲は勝つ者い従ひ。欲義は勝

つ者い凶なり。同

○瓜田は履を納れど。李下は冠を

正さむ。文選

○常を厭ひて新を喜び。正を嫉こ

て奇を好むい。古今の通病なり。童子

問

○若し業の成るを要せば。先つ窮

困を受ること。を學ぶべし。若し煩

悩なまことを要せば。唯だ足ることを知るべし。續小兒語

○白日爲を所い。夜來已れを省る。惡なれば驚くべし。善なれば喜ぶべし。同

○獨り立ちて影ふ慚ぢぢ。獨り寢て衾ふ慚ぢぢ。劉子新論

○司馬溫公曰く。吾れ平生人よ過ぐる處あり。但だ平生爲を所の事。人よ對して言ふべからざるもの無きのみ。

○妄よ人の言よ任せて語り傳ふべからむ。人の胡亂なることを信じて人よ語れば。我も亦虚言をい

ふの罪あり。大和俗訓

○學を爲さむ。今は是ふして昨日
非なるを覺ゆべし。日よ改め月よ
化して便ち長進む。朱熹

○人の小過を責めむ。人の陰私を
發かむ。人の舊惡を念ひま。三のも
のい。惟た徳を養ふのこからむ。亦

害を遠ざくべし。遵生八牋

○分よ過ぎて福を求むれば。適
以て禍を招ぎ。分よ安んば禍を遠
ざくれべ。將よ自ら福を得んとむ。

紳瑜

○言語を慎みて其徳を養ひ。飲食
を節よして其體を養ふ。事の至近

小して繋る所至大なるものい言
語飲食ふ過ぐるいなし。程子

○人よ周いたことを樂む者い。自
ら奉むること必だ薄し。身よ奢る
者い。恵みその親よ及ばむ。畜徳録

○智あれば則ち問ふことを好
て樂み。智なければ則ち自ら用ひ

て憂ふ。同

○古人の是非を品評するい可な
り。今人の善惡を妄議するい不可
なり。恨を取るい。多く妄議よ在
り。言志録

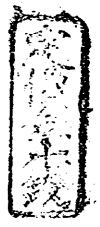
○自ら重んぜざる者い辱を取り。
自ら畏れざる者い禍を招く。自ら

満たざる者の益を受け。自ら足れり
とせざる者の聞を博くむ。願體集

小學修身課書卷三終

課書自一至十一

明治十五年四月廿五日版権免許
明治十八年四月廿五日刻御届
明治十八年五月出版發賣



青森縣士族

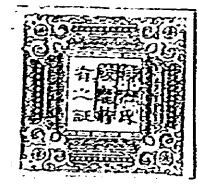
編輯人 南 摩 綱 紀

麴町區雷吉町丁目七番地

東京府平民

出版人 柳 河 梅 次 郎

日本橋區本町二丁目十番地



製本發賣所

廣島縣下薩摩國廣島六百町通リ仲町

書肆 吉田 幸 兵 衛

